



ヨットに明け暮れた青春から二十余年。いま博多リブレインから見えるのは閉店する老舗デパート。我が懐かしき日々、そして消え行くものへの哀歎と残影…。筆者の青春フォトグラフィーはいまも輝きを失っていない。

(通称委員 馬場岡一郎)

”博多湾の ダイヤモンドヘッドへツド”。

持田 聡

Satoshi MOCHIZUKA

中央区警固

私が青春時代を過ごしたF大学ヨット部の連中は皆がそう呼んでいた。小戸公園の能古島側に突き出た小高く黒い山のことである。この山は、私たちにとって「安堵」の象徴だった。荒れ狂う玄界灘での長い辛い帆走を終えてヨットハーバーに帰港するとき、まるで「お帰りなさい。」とでも語りかけてくるかのように、いつも船首の正面に優しく佇んでくれていたからだ。また、ハワイのランドマークであるそれとよく似た、なだらかな台形をしたこの山は、本家に負けず劣らず美しい姿を呈してもいた。春は所々に新緑の若草を纏い、夏は燦々と眩しく輝き、秋は夕日に赤く染まり、時として雪を冠する冬には黒と白のコントラストが見事だった。

私が大学を卒業した直後、博多湾のダイヤモンドヘッドは忽然とその姿を消した。昔日の早良炭坑の忘れ形見のボタ山であったこの山は、シーサイドもみやマリナタウンの埋立ての礎として全てが削り採られたのだ。まさに、私の青春の終焉でもあった。

山笠の集団山見せの日、近代的な博多リブレインのまえに陣取ると、川沿いの角地に立つTデパートの古めかしくも風格のある全容が見渡せた。その前を山が駆け抜ける。飛び散る勢い水は、昇き手の藍色の法被と相俟って、玄海の荒波そのものだ。ふとTデパートの倉庫を見上げた時、私の中で何かがインスパイアした。その姿が、博多湾のダイヤモンドヘッドと二重写しになったのだ。中にはいると、ロビーの長椅子に腰掛けている数多くの年配の人々。買い物をするでもなく、ただ呆然と店内を眺めている。この老舗の歴史を懐かしむかのように。ボタ山が消えた日の私も多分、こんな表情をしていたのではないだろうか。

ノスタルジイと時代は景観とともにある。今、あのボタたちは、新しいノスタルジイを私に与えてくれている。私が大好きな百道の素晴らしい景観を立派に下支えしながら…。

